2014年度　　NB

国　語(B方式)

注　意

1. 問題は全部で9ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ○ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現在のわたしたちの古典文学史の把握のしかたには、残念ながら既成の通念に支配されているところが少なくない。近世国学の流れを汲む見方は、[1]かなぶみの作品だけでこの国の文学の歴史をたどってみようとする、強引な網渡り文学史を存続させつづけているし、ジャンルという、近代の文学研究が方便的に用いている概念で、文学の歴史を細く狭く分割すると、その細分化したジャンル別の歴史の帯の内側に、作品を閉じ込めてしまう。ジャンルを越えて働きかけていく力を予想しようとしない。

〈物語文学〉とか〈作りものがたり〉というジャンルを考えるのはよい。だが、その枠の中だけで「生成・発展・没落」式の歴史過程を閉鎖的にしか考えないとすると、かえって文学の歴史の実態から遠のくことになるのではなかろうか。物語の出で来はじめの祖(おや)『竹取物語』から始まり、『源氏物語』のピークに達し、平安後期の低迷の時期へ落ち込んでいく、という捉え方だけでよかろうか。

フィクションの物語は、別の新たな方向へもかなぶみの散文を溢れ出させていく。その傍流とも見えるものが、文学として、本流の端末などとは比較にならない大きなものを産み出す。歴史物語の擡頭(たいとう)なども、物語文学の歴史からは付随末端の現象と見られていることが多いが、これは歴史物語そのものについて具体的に考察していない場合の見方に過ぎない。男たちが書き始めた〈作りものがたり〉の主な読み手は女たちだった。やがて、その物語の読み手の中から、紫式部のような女の書き手たちが登場する。多くの女の書き手がそのあとにつづく。それだけではなかった。『栄華物語』の最初の書き手、[A]のような、フィクションの物語の育てた文章でかなぶみの歴史を描く人も出て、新しい局面が開ける。『栄華』は漢文の史書と異なって、〈後宮史〉と言うべきタイプの歴史を打ち出した。その『栄華』によって切り開かれた歴史物語の分野に、次に、男の書き手が躍り出て来て、『大鏡』を書く。[2]〈作りものがたり〉から生まれた鬼子と言ってもよいだろう。

『大鏡』を歴史物語と分類して、『栄華物語』と一括し、ただ〈歴史〉と見過ごしているのが、『大鏡』の研究の一般の現状である。作者がなぜそういう歴史叙述を志したのか、実際の作品に即(つ)いて見てみれば明々白々。漠然たる歴史一般が作者を大著作に駆り立てるわけはない。『大鏡』がめざしているのは、まさしく〈摂関政治史〉であり、それ以外ではない。しばしば、『栄華』の作者の批判精

神の欠如と『大鏡』の旺盛な批判精神とによって、この二つの歴史物語を比較しようとする論が見られる。それも、両者が別種のもの、〈後宮史〉と〈摂関政治史〉の違いを持つことを前提としての論でなければ、なんの意義もない。

〈摂関政治の歴史〉、藤原道長によってゆるぎない機構に組み上げられた、あの摂関政治のピークにいたる〈政治史〉というものを、かつて試みた人はいなかった。作者は、それをかなぶみの物語の形を用いて企てた。[3]あえてそうするところに、漢文でなく物語の方法によってはじめて浮かび上って来るであろう、摂関政治のなにかを、彼が感じとっていたからに違いない。男は、こうしてかなぶみを奪い返した。

しばしば、『大鏡』は藤原道長の繁栄を描くことを主眼としていた、と言われる。序に、「としごろ、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことも聞こえあはせむ、このただいまの入道殿下の御有様をも申しあはせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひまうしたるかな」とあるのを見ても、確かにそう言えよう。しかし、ほんとうにもしそれだけならば、作者は、世継*や繁樹に百九十とか百八十という超事実的年齢を仮さなかったであろう。道長の繁栄を語るにしても、一世紀半遡って、冬嗣・良房に起点を置かねばならぬところに、[4]作者を衝き動かしているものを捉えるべきではなかろうか。「百九十歳という年齢は、摂関政治の年齢であった。この(摂関政治史の)発想が要求する年齢であった」とわたしはかつて述べたことがあるが、作者が『栄華物語』の宮廷行事を軸として歴史を描こうとしなかった傾向に、目を凝らす必要がある。作者は藤氏内部の権力の移動、代々の権力者の一々の子女の行く末まで洗い立てて、族譜を明細に語る。

わたしは、『大鏡』の作者が今あらたに道長期を絶頂点とする摂関政治史を描こうとしたのは、おそらく、院政*時代における摂関的権力の動揺と密接にかかわり合っているものと考える。藤原北家の手によって始められた摂関政治が確立し、北家内部での幾転を経て、道長流の一門に権力が固定していく過程を、微視的・系譜的に追っていくのは、どう考えても族内的視角の持ち主の手さばきである。だから、従来、源氏の人々を作者に擬する研究が有力だが、その点からも再考を要することのように思っている。

『大鏡』の作者の時代は、描かれる『大鏡』の時代ではなかった。しかし、作者は、傍観者あるいは客観者の語る歴史の弱さを知っており、自己をフィクションによって歴史の中に投げ込み、あえて〈同時代史〉の立場に立とうとした。自己に内在する歴史体験に化して語ろうとする。近世藤氏閥閲史を近代藤氏閥閲史として描く。万寿二（一〇二五）年五月の京の雲林院の菩提講の日に、自己の時所を定め、その一点から発想して、はるかな世々を簡略に、時代が下るとともに濃密に描く〈遠近法〉を用いる。

しかも、作者は、その藤氏内部の権力の移動、族譜の明細を語る者を〈大宅世継〉と呼んだ。公家の代々の系譜（世継）を語る者と名乗らせる以上、形は閥閲史となりつつ、意図において政治史であった、と考えねばなるまい。政治というものが、そのような形でイメージされるところに、作者と時代との性格が表れている。

卑賤のフィクションの〈古老〉大宅世継が設定されることは、同時代史的方法を採りつつ、作者が歴史叙述の自由を保留するために必要なことであったろう。しかし、北家の中核部分と接触を保って来たにしても、その設定された語り手は卑賤の者に過ぎない。その彼が権力者たちの行動を、物語の中でとは言え、こまかに語り得るのは、それぞれの勢家内部の貴卑つつぬけの擬身内的構造と、貴族社会そのもののコミュニケーションの緊密さという、古代的事情にささえられている。そのようなフィクションが異常すぎて受け容れられないほどではなく、日々の噂話とそのかみの故事とが満ちみちて、人々がそれを尋常としていた時代の産物である。故事は、家々としても、貴族社会としても、豊富に蓄積されており、このような故事譚による歴史叙述という『大鏡』の発明の可能性の、温床を形成していた、と考えられる。

作者は、自己の分身世継を通して前代に自己を生かし、自己の歴史体験としての歴史を幻視するが、その際にも、描こうとする歴史を百九十翁の独り語りにしなかった。第二の分身、百八十歳の夏山繁樹と語り合わさせる。繁樹は、その長い年月を同じように貴族社会に接触しつつ生きてきた。世継の談話の保証人として、不可欠の設定である。だが、作者は、語り合う世継と繁樹の境遇をことごとく対照的に配慮している。生学問があり、世継の生年を書き残しておいたその父と、事情があってわが子を市に来て人に売った繁樹の母と。したがって正確な生年月日さえ知らない繁樹として語られている。二人の妻に関する条件設定も対照的で

ある。糟糠の妻を帯同して参詣している繁樹。最初の妻を喪い、後添い妻も運悪く病気で連れて来ていない世継。そういう語り合う二人の状況の違いは、はじめからではなく、会話の中で自ずから判明していく。

そこに第三の分身と言うべき若侍が介入して、この三人の座談で歴史は復原されていくのだが、実は、第四の分身、これら三人の話をそばで聴き耳を立てて聞いている人間があり、この第四の人物こそが『大鏡』の書き手ということになっている。『大鏡』の作者は、このフィクションの書き手に自分の座を譲った。講師の登場を日がな待ち暮らす菩提講の群衆の一角に彼をそっと置く。描こうとする時代に自己を投げ込み、同時代史の迫真性を創出しようと企てつつ、なお描かれるものに対して客観的性格を主張しようとすれば、自己の最終的分身を純粋な［　B　］として保証しておかなければならない。作者は、賢明にもそれを忘れていなかった。

『大鏡』のドラマ的全体構造は、その流動的で明晰な、力強い文章とあいまって、新しいもう一つの物語[6]、歴史叙述としても新しいもう一つの世界を創出している。

藤原北家が良房・基経によって摂関政治の道を切り開いても、律令政治を私的な諸契機を持つ、新しい変形政体に馴致するには多くの障害があった。宇多天皇と皇親の左大臣源融という組み合わせや、融死し、宇多譲位後の右大臣菅原道真の存在などは、藤原北家にとっては歓迎すべき勢力ではなかった。古代の摂関政治は、律令政治を打ち倒して出現したものではなく、律令政治機構を温存しつつ、荘園私有への土地所有の転換と対応する、律令政治の非律令的変容をはかって現れたもの、律令政治の土台に寄生する政治形態である、というややこしさを持っている。摂関の権力は、律令の保障する天皇制を損壊しない。天皇の外戚として、天皇の存在に寄生する非天皇制要素の肥大化である。

時の左大臣源高明の強引な引き下ろし、いわゆる安和の変(九六九年)もそうだが、北家は、いくたびも一門の力を結集して政争を挑み、摂関政治確立のための障害を打ち破った。その後に、北家一門の内部においても、血族が抗争、自流の力を安定しようとはかっている。儒者で受領上がりの菅原道真が右大臣となり、娘を皇太子妃にまでした時、藤原氏はこれを放置出来なくなった。

『大鏡』が一般的な意味での政治史であるならば、藤原氏がどのようにして菅原氏を政権の座から退けたのか、を語ることに専念するだろうが、作者は、「ともに世の政をせしめたまひしあひだ、右大臣(道真)は、才よにすぐれてめでたくおはしまし、御心おきてもことのほかにかしこくおはします。左大臣(時平)は、御年も若く、才もことのほかに劣りたまへるにより、右大臣の御おぼえことのほかにおはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこといできて、」と肝心なことを回避している。[7]

政治史一般としてならば重要なはずの他氏族との政争は、かなぶみの物語らしくおぼめかし、北家一門内部の勢力の隆替消長ならば、その経緯を語っていく。わたしがさきに閥閲史という言い方もしたのはそのためで、一門内部での摂関のポストの流動、最後に道長流にいたって、その政権掌握が不動のものとなる過程を描こうとするのが、作者の本意らしい。

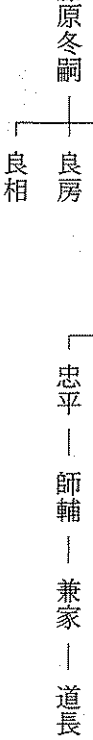
その点で、作者が、世継に、藤原北家の策動によって配所で死ぬことになってしまった、藤氏の政敵菅原道真の境涯に満腔の尊敬と同情を捧げる姿勢をとらせているのは、[8]一見矛盾するかに見えて、必ずしもそうではないのである。藤原道長という摂関政治の頂点を作り出した人物は、九条師輔の孫であり、繁樹が仕えていたという忠平の曾孫である。忠平は、道真と対立抗争した時平の弟であるが、北家一門内部の眼でみると、一流れの感覚はない。時平の血統が衰退して、忠平の血統がとって代わった、という捉え方が強い。『大鏡』は、左大臣冬嗣から列伝をはじめ、第二世代の太政大臣良房・右大臣良相・権中納言従二位左兵衛督長良について叙し、第三世代である長良の子、太政大臣基経へと語り進むが、第四世代では、基経の子時平・忠平の二流があり、前者がほとんど衰退した、という見方をしている。

時平の子息では、右大臣になり、六十歳までながらえた顕忠を除いては、「これよりほかの君達皆三十余・四十にすぎたまはず。そのゆゑは他の事にあらず、この北野*の御嘆きになんあるべき」という見解である。道真の怨霊により左大臣時平流は夭折相継ぎ、血統として衰退し、政治の中心の座から消えていった。忠平の血統にとっては、〈前王朝〉的別流と目されている。『大鏡』の菅原道真を語る文脈では、政敵時平は悪役の側に回されており、そういう容赦ない語られ方をしているが、それを悪いとは考えていないらしい。

この北家内部の遠近感に眼を向けないと、藤原氏が道真を迫害したことを、被迫害者に同情する立場で書いていることが、あとの道長賛嘆などと矛盾する、了解しにくいことと感じられるかもしれない。時平流に対する批判は忠平流には及ばない、という論理が横たわっているらしい。

（益田勝実の文章による）

（注）



（基経は、良房の養子となる）

＊世継や繁樹…『大鏡』の中で歴史を語る二人の老人、大宅世継と夏山繁樹。

＊院政時代…『大鏡』の成立は、十一世紀後半から十二世紀前半の院政時代。

＊藤原北家…奈良時代の初め、藤原不比等はその四人の男子を、南・北・式・京の四家に分けた。北家は、不比等の次男房前を祖とする家で、やがて冬嗣や良房が出る。

＊閥閲…家柄、門閥という意味。

＊万寿二～菩提講の日…『大鏡』は、この日の菩提講で法華経を講説する講師が登場するまでの間に、老人たちが歴史を語るという設定になっている。

＊北野…ここは、菅原道真のこと。北野天満宮にまつられたことからいう。

問一　次の①～⑤のうち、傍線部1「かなぶみの作品」ではないものを一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[1]。

① 土佐日記
② 枕草子
③ 文華秀麗集
④ 大和物語
⑤ 堤中納言物語

問二　[A]に入る人名として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[2]。

① 清少納言
② 赤染衛門
③ 菅原孝標女
④ 藤原公任
⑤ 藤原定家

問三　傍線部2「〈作りものがたり〉から生まれた鬼子」とは、どのような意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[3]。

① 〈作りものがたり〉とは異なって、現実の歴史の厳しさを描いた恐ろしいもの。
② 〈作りものがたり〉の中に歴史を含んでいるために、世の中の役に立たないもの。
③ 〈作りものがたり〉の伝統からはみ出した、物語と呼ぶにふさわしくない迷惑なもの。
④ 〈作りものがたり〉が単なる虚構に過ぎないのに対して、歴史を扱う点ですぐれたもの。
⑤ 〈作りものがたり〉の変転から現れてきた、〈作りものがたり〉とはずいぶん異なったもの。

問四　傍線部3「あえてそうする」のは、なぜか。その理由として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[4]。

① 『栄華物語』は歴史物語として失敗作であると考えた作者が、その二番煎じにならないようにしたから。
② かなで歴史を書くことは政治家への批判と見なされタブーだったため、そのタブーを破ろうと試みたから。
③ 漢文で書かれる歴史叙述に対して、歴史をかなで書くことで漢文とは異なる可能性を見出そうとしたから。
④ 歴史という現実を物語にすることには批判が予想され、かなで書くことでその批判をかわそうとしたから。
⑤ 当時、物語作者は女であり、男が物語を書くためには、女のふりをしてかなを用いなければならなかったから。

問五　傍線部4「作者を衝き動かしているもの」とは何か。二十字以内で答えよ（句読点を含む）。解答用紙（その2）を使用。

問六　傍線部5「自己をフィクションによって歴史の中に投げ込み、あえて〈同時代史〉の立場に立とうとした」とは、どういうことか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[5]。

① 現在と過去と二つの時点から平行して歴史を捉えることによって、どちらの時点の価値観にも左右されない客観的な歴史を書こうとしたということ。
② ある歴史の時点に架空の自分を置くことによって、歴史そのものを定点観測となるような主観的な眼で捉えたフィクションとして書こうとしたということ。
③ 現実に自分の生きている時代の価値観などを歴史に投影することによって、過去の歴史を相対化しながら現在につながるものとして書こうとしたということ。
④ 自己を歴史の中の存在として設定することによって、実際の歴史には起こらずに可能性として存在していた要素までも含めて、歴史を書こうとしたということ。
⑤ 執筆の時点から歴史をふり返るのではなく、過去の一時点に仮の存在としての自分を置くことによって、その自分に直接間接に関わるような歴史を書こうとしたということ。

問七　[B]　に入れるのに最適なことばを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[6]。

① 超越者
② 演出者
③ 読み手
④ 聞き手
⑤ 作り手

問八　傍線部6「もう一つの物語」に対する、本来の物語とは何か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は、[7]。

① 物語文学
② 作りものがたり
③ 歴史物語
④ 女の物語
⑤ 平安後期物語

問九　傍線部7「肝心なこと」とは何か。二十字以内で書け(句読点を含む)。解答用紙(その2)を使用。

問十　傍線部8「一見矛盾するかに見えて、必ずしもそうではない」とあるが、それはなぜか。三十字以内で答えよ(句読点を含む)。解答用紙(その2)を使用。